

国際文化振興会写真作製事業に関する一考察

——「KBS フォトライブラリー」形成と活用の展開——

白 政 晶 子

1、はじめに

1934年4月、国際文化振興会（以下振興会と略記、1972年10月国際交流基金設立にともない解消）は、満州事変勃発や国際連盟脱退により国際世論が悪化した日本のイメージアップをはかるため、外務省の外郭団体として設立された。総裁高松宮宣仁親王、初代会長公爵近衛文麿、副会長侯爵徳川頼貞・男爵郷誠之助、理事長伯爵樺山愛輔など皇族・華族が組織の中心となり、各事業には様々な分野の専門家が参加し、海外展覧会への資料供与・研究者の交換・講演会開催・資料作製など多様な文化交流事業を展開した⁽¹⁾。このような文化活動は、設立趣意書に「一国家カ其ノ国際的地位ヲ確保シ伸張スルニハ富強ノ実力ト相並ヒテ自国文化ノ品位価値ヲ發揮シ他国民ヲシテ尊敬ト共ニ親愛同情ノ念ヲ催サシムルヲ要スルコト亦多言ヲ要セス」⁽²⁾と意義付けられていることから、文化紹介という穏健な手段をとった国策宣伝であったと見なせよう。このような理念のもと振興会では新旧日本文化紹介を目的とした資料作製（書籍・映画・幻灯・写真・レコード）が行われた。「KBS フォトライブラリー」⁽³⁾とは、資料作製事業の一企画であり、振興会製作写真（KBS フォト）を取めたストック（使用に備えて製作された写真群）を指す。KBS フォトは、正式には「日本の文化と生活」⁽⁴⁾（以下「文化と生活」と略記）という事業であり、「文化と生活」シリーズを中心とした KBS フォトは1935年8月から1943年頃まで継続的・網羅的に製作された。日本の伝統文化と近代発達を示すあらゆるモチーフを主題に沿って撮影するもので、プロカメラマンが関与し、しかも体系的なフォトライブラリーを形成した日本で初めての試みであった。1940年には総数約17,000枚の多きに達した⁽⁵⁾。撮影には木村伊兵衛・渡辺義雄・名取洋之助・土門拳等の著名な写真家が関わった。1933年以降、日本写真界では名取がドイツよりもたらした「報道写真」が主流となり、1934年には日本初の「報道写真展」が開催されるなど、様々な写真家が報道写真に関心を持って取り組んでいた。日中戦争開戦以降、報道写真は「写真報国」というスローガンのもと国家宣伝の手段として重視されるようになる。木村や渡辺等にとって日本の様々な主題に取材した KBS フォトの撮影は、報道写真家としての初期の仕事として位置づけることができる。また、KBS フォトは写真家によってのみ製作されたのではなく、撮影写真の審議を行う写真委員会が設置され、板垣鷹穂（美術史家）・谷川徹三（哲学者）・杉山

平助（文学者）・藤田嗣治（画家）・成澤玲川（朝日新聞社）など著名な芸術関係者や知識人が携わった。一流の美術関係者と写真家の共同作業により綿密に製作された KBS フォトはそれ自体として芸術性の高いものであったと考えられるが、しかし、今日ではその目録も出版されておらず、フィルムやプリントも発見されていない。その一部は印刷物に掲載されたものから断片的にうかがい知るのみである。

KBS フォトの製作や事業の実態に関する具体的検証はいまだなされていないといえる。井上祐子『戦時グラフ雑誌の宣伝戦』⁽⁶⁾、川崎賢子・原田健一『岡田桑三映像の世紀』⁽⁷⁾では KBS フォトライブラリーについて言及があるものの、この事業を中心に論じたものではない。日中戦争以降の名取洋之助の振興会での活動は白山真理の先行研究に詳しいが⁽⁸⁾、対外宣伝グラフ雑誌『NIPPON』を中心にしたものである。さらに芝崎厚士『近代日本と国際文化交流』（有信堂、1999年）、柴岡信一郎『報道写真と対外宣伝』⁽⁹⁾は KBS フォトの概要を提示している。本論は振興会関係資料に基づき KBS フォトを具体的に検証する初めての試みである。

2、企画立案、写真作製準備—1935年1月－6月—

本章ではフォトライブラリー事業に至る経緯を見ていく。設立当初に配布された小冊子『財団法人国際文化振興会の仕事』⁽¹⁰⁾に記されている事業は「著述、編纂、翻訳及び出版」「講座の設置、講師の派遣及び交換」「講演会、展覧会及び演奏会の開催」「文化資料の寄贈及び交換」「知名外国人の招請」「外国人の東方文化研究に対する便宜供与」「学生の派遣及び交換」「文化活動に関係ある団体若くは個人との連絡」「映画の作製及び其の援助」「会館、図書室、研究室の設置経営」の10項目を数える。事業開始のための準備として、1934年には各国（東欧・北欧・中南米、アメリカ・フランス・ロシア等）に連絡員を派遣し、国情調査や文化交流・日本文化研究の実態調査を行い、調査結果を踏まえて国別に文化宣伝の方策が練られた。昭和九年度は事業開始のための準備期間であり、すべての事業が開始されたわけではなかったが、資料作製事業（日本文化関連書誌目録）は国内外の日本文化関連書籍の調査と並行して設立一ヶ月後から早々に着手された。さらに日本文化紹介や研究のための補助教材として企画された視覚資料は文字資料に遅れること約一年の昭和十年度に開始され、映画、幻灯、写真の順で立案、着手された。

写真事業の初出は1935年1月21日付の「第十六回常務理事会」に関する書類である⁽¹¹⁾。これは理事会の前に協議事項を理事に照会するための書類で、「出版物、美術品、写真、幻灯、フィルム等の寄贈については如何」となっている⁽¹²⁾。2月8日の「第十六回議事録」は昭和十年度の事業計画を話し合うために開催されたが、「議事録」には写真に関する協議の記録はない⁽¹³⁾。3月18日の「第十八回理事会」で初めて写真作製費が昭和十年度予算に計上され、総事業費344,000円のうち、「幻灯板、写真、映画、蓄音機盤ノ作成」には一割強の41,000円が充てられた⁽¹⁴⁾。写真事業が「日本の文化と生活」という企画として具体化したのは4月である。1935年4－6月の英

文機関誌『K.B.S.Quarterly』によると、4月の理事会において同時代の日本文化を様々な分野に亘って紹介する「Series on Japanese Life and Culture」(『日本文化叢書』)⁽¹⁵⁾とセットの企画として、「Picture Series on the Life and Culture of Japan」(「日本の文化と生活」)案が提出され、好評を博したとされる⁽¹⁶⁾。振興会の出版物の多くは入門者用の日本文化研究資料として企画されたが、『日本文化叢書』も「昨年来関係者に研究を依頼したる結果に基き海外に於ける正確なる日本理解を企画し先づ米国中等学校教師用参考書を編纂する目的⁽¹⁷⁾」で企画された。『昭和十年度事業報告書』によると、5巻で構想され、各巻の主題は「国土、人民、歴史」「文化、社会制度」「文学、芸術、科学」「農業、工業、経済の問題」「政体、政治、国際関係」と、「現代」のトピックを網羅したものとなっている。先述のように写真「文化と生活」は当初『日本文化叢書』の副教材として企画されたため、この叢書の主題と初期の撮影主題はほとんど重複していると考えられる。

写真「文化と生活」の企画はさらに具体化する。6月14日には理事会において「Japanese Life に関する写真帳製作の件」が協議された⁽¹⁸⁾。その内容は、「海外よりの需要に基き、日本及日本人の生活一般(政治、宗教、社会、経済、芸術其他)を示すべき写真を撮影及び蒐集し各部門に集録し、国によりて編輯をかへて送ることとす。右費用約六千円を可決。実行に入る前に既に蒐集せる写真につき批評の会合を催すこととす」とされた。「国によりて」という部分から、写真事業にも昭和九年度の海外調査報告が反映されたことが推測される。例えば、連絡員中屋健式によるアルゼンチンの調査報告(1935年1月10日付)には「将来行フベキ文化工作」が映画・演劇・音楽など各分野に亘って示されており、海外調査は詳細かつ具体的なものであったことが分かる。中屋は写真「文化と生活」と同様の目的を持つ国情紹介映画の製作方針に言及し、「近代国家トシテ日本ヲ紹介スルコト。桜、富士、ゲイシヤノ国トシテノ日本紹介ハ従来稍モスレバ我ノ国ヲシテ「エキゾテイク」ナル国家ニシテ欧米文明ト全クカケハナレタル文明ノ国ナリトノ感ヲ懷カセ居レリ。伯国民ハ到底、東洋ノ精神的文明ヲ理解スル能力ニ迄到達シ居ラザルヲ以テ物質文明ニ劣レル国ハ劣等ナリトノ観ヲ有スルガ故ニ日本紹介ニハ物質文明的ナル場面ヲ紹介セザレバ不可ナリ。故ニ、軍艦、演習、大都会ノ建築、交通機関、大学、工場等ノ場面ヲ取材スルハ最も必要ナルモノトス。就中我国ノ経済力ヲ示ス産業方面ノ撮影ニハソノ生産過程ヲ示スコト有効ナリ⁽¹⁹⁾」とし、国民性や日本紹介のあり方を踏まえた上での具体的な主題を示した。調査結果を踏まえ、振興会では過去の形式化された日本文化紹介(フジヤマ、ゲイシヤ)のあり方を反省し、伝統主題を紹介する際には雅楽や日本画など学問性・芸術性が高いとされる表現媒体を選んだ。また、調査結果を反映し、振興会は欧米向けには日本の伝統文化を、南米・中国・東南アジア向けには日本の近代発達をアピールする方針を持った。この2つの方向性は各資料作製事業にも反映されており、1940年の事業報告によると、KBS フォトにも「伝統文化の記録保存」「現代文化の創造性の高さの記録ならびに宣伝」の2方向があるとされる⁽²⁰⁾。

企画はさらに具体化する。『K.B.S.Quarternary』によると1935年4-6月には製作の下準備として日本人の生活と習慣に関する調査が行われ、振興会職員が数百もの雑誌・書籍・新聞等から複製写真を収集したことが記されており、6月に「Japanese Life に関する写真帳製作の件」で言及された「批評の会合」では、この時採取された複製写真を基にして協議が行われたと考えられる。『昭和十年度事業報告書』では資料作製の動機に、①従来の日本研究資料は専門性が高く手ごろな参考資料が不足していたこと、②過去に作製されてきた日本紹介資料は切り口が形式化しているため、新たに「現代日本を明確に紹介すべき資料を作製」するとあり、写真製作の準備段階では実際に過去の写真資料を分析しながら、「現代」の発展した日本像を作り出すための具体的な方針（主題やモチーフ等）を決定していったことが分かる。

3、前半期—1935年7月—1937年9月—フォトライブラリーの形成—

約四カ月の準備期間を経て、1935年8月には撮影に入る。写真「文化と生活」シリーズの作製は1943年頃まで継続的に行われたが、写真数が揃い、名取洋之助に配信が一任され、フォトライブラリーの活用が重視されるようになる1937年10月頃を境に、KBS フォトライブラリー事業を前半期、後半期に分けることができる。本章ではまず写真委員会が関与した前半期の写真製作に言及する。なお、撮影の進行については文末の表にまとめてある。

撮影に関する最初の会議は1935年7月18日に行われ、主題に沿って大量の写真を撮影すること、撮影は専門写真家に依頼することが決められた。主題を設定して撮影を行う方法は報道写真の手法であり、当時はまだ斬新な手法であったと推測される。ここで、撮影の指針となる主題について触れるが、主題の概要については柴岡信一郎がすでに言及している。つまり、主題には大項目（11-14種）、中項目（約2,500種）、小項目（約17,000種）があり、階層的な分類が行われ、KBS フォトライブラリーの整備が進んだ1939年と1940年に大項目の種別の概要が初めて明らかにされた。しかし、中項目、小項目の内容は断片的にしか分かっていない。1939年に示された大項目は「産業」「建築」「交通通信」「教育」「宗教」「社会事業」「都会生活」「日本の四季」「芸術」「趣味娯楽」「スポーツ」「家庭生活」「映画スチール」「庭園」の14種であり⁽²¹⁾、1940年にはさらに整備が進み、『国際文化事業の七ヵ年』によると、大項目は以下の11種に纏められた（文末の○種は小項目の数で計16,991種）。

「産業」重工業から軽工業、農漁業に至る 1,868種

「家内工業、手工業」陶器製作、西陣織、版画、刀鍛冶等 1,343種

「建築」神社仏閣、近代建築、和風欧風住宅 696種

「教育、学校生活」幼稚園から大学まで 2,438種

「体育、スポーツ」競技大会から学校の訓練、武道 824種

「交通」鉄道、航空、道路、旅行設備 5,040種

「都会生活、社会生活」ビジネスセンター、アパート、動植物園、都会人 1,524種

「四季」風景、年中行事、都市農村景観 871種

「芸術」能、歌舞伎音楽から博物館、郷土芸術まで 1,457種

「趣味」花道、茶の湯、料理等 503種

「庭園」桂離宮等の名園 427種

おそらく小項目の数字はKBS フォトとして採用された写真の枚数である。また、「建築」「体育、スポーツ」「芸術」などは伝統文化と近代発達の要素が入り混じっているもので、簡単に分けることはできないが、伝統文化に関連する主題を「家内工業、手工業」「四季」「芸術」「趣味」「庭園」とすると小項目数4,601種、近代発達に関する主題を「産業」「建築」「教育、学校生活」「体育、スポーツ」「交通」「都会生活、社会生活」とすると小項目数12,390種となり、KBS フォトライブラリーには日本の近代的な側面を取り上げた写真が多かったと考えられる。この事業の意義について振興会は1940年には写真事業を振り返って、「写真製作における本会六年間の成果は、(一) 日本文化の典型的場面を文化資料的視野に於いて撮影したこと、(二) 写真製作における組織性を確立したこと、(三) 文化写真資料の完備による一個のライブラリーを作り上げたこと、さうして最後に(四) 前述の、KBS の三文字を冠した写真の数万枚が全世界に配給され、在外公館、外国における諸文化団体、ジャーナリズム・出版の世界、外交団体の書庫中に現存してゐるといふ状態をつくりあげたことは極めて大きな成果であらう⁽²²⁾」と、製作方法の独自性やフォトライブラリーシステムの先駆的導入を自負している。

撮影開始の経緯に戻ると、1935年7月29日には名取洋之助（日本工房）、木村伊兵衛・渡辺義雄（中央工房及国際報道写真協会）の了解を得、同月31日に三者を交えた会議を開催し、主題の割り当てと各人の撮影枚数が決められた⁽²³⁾。振興会の資料からは割り当ての詳細は判明しないが、芝崎厚士が先行研究で示した木村と永田弁三郎（写真担当職員）の回想によって断片的に知ることができる。木村は「日本の学校教育、祭礼、お月見、古い日本風の商店、働く婦人、農村、能、歌舞伎、家庭生活、茶の湯、いけ花など、私に注文されたテーマはごく普通のものであった⁽²⁴⁾」と述べ、永田は製作の様子を回顧して「木村伊兵衛、渡辺義雄の両氏が腕を揮われました。木村さんは主に人物、社会生活、風俗習慣、芸能一般を、渡辺さんは得意の新旧建築、絵画、彫刻をというふうにして一そうですね、二人の作品だけで大体一週間に二百枚程度の割合でしたか、それは実にぞくぞく出て来たのです」と述べる。木村は「年中行事」「教育」「伝統文化」等の主題を担当し、渡辺は「建築」「絵画」「彫刻」等の主題を担当したようである。『K.B.S.Quartery』を見る限り、撮影者として名取が関わったのは1935年8月のみであったようで、KBS フォトライブラリーの礎を築いた前半期の撮影は、主に木村・渡辺が中心に行ったと考えられる。

撮影には振興会が主題に沿って決定したモチーフを写真家が撮るという方法が採られたが、木村は、このように振興会の意向を反映して撮影された写真でさえも、既撮写真には構図やモチー

フなどについての厳しい注文が入ったことを回顧している。「出来あがった写真を持っていくと必ず駄目が出る。学生の洋服がきたない。女の先生が眼鏡をかけている。子供がハンケチでなく手ぬぐいをぶらさげている。エレベーター・ガールがハイヒールをはいていない。和服の婦人の頭が日本髪だから野ばんだと誤解される。街に行く洋服の男子が帽子をかぶっていない。ビルや電車は外国に負けるからいけない。自動車が古い。農夫の田植え姿がきたないし、はだしは野ばんだ。労働者の上半身のはだかが困る。などなど実に神経質のようなおごとであった。上役の殿様連中のお言葉を長島さん（振興会事業部長長島喜三：筆者）がいいにくそうに取次いでいるのだが、これではないものねだりがすぎて仕事になりゃしない。たまには、わたしだって文化宣伝はしろとじゃないよ、世界中にタキシードを着たり、紋付きはかまで田植えをする百姓がどこにあるかと、たんかの一つも切ったことがあった⁽²⁵⁾」とあり、振興会は日本に「野蛮」な印象をもたらしうるイメージを海外に配信しないよう細心の注意を払っていたことが窺われる。このようなイメージ作りの基準も昭和九年度の海外調査結果を踏まえたものと考えられる。例えば、先述の中屋健式によるアルゼンチン調査は観光宣伝用パンフレット、ポスター、アルバム製作にも及んでおり、「西洋人ノ嫌忌スル風体ノモノヲ避ケルコト。人物ニテ臍ヲ出シ（中略）裸体（中略）婦人ヲ侮辱スルガ如キハソノ例ナリ⁽²⁶⁾」と「野蛮」な印象を与えるモチーフを具体的に指摘している。

それでは、撮影の様子を辿っていこう。撮影はすぐに開始され、8月中に「大量の写真」が撮影された。この時撮影された主題は、①「慣習」「年中行事」「生活」、②「スポーツ」「娯楽」、③「公共施設」「通信」「輸送」「工業」、④「教育」、⑤「農業」「酪農」「水産業」等である。最初のひと月で様々なジャンルを網羅する大掛かりな撮影が行われた。また、この時は伝統や文化に関連した主題はほとんど撮影されず、「現代」に関連した主題が多かった。これらは『日本文化叢書』の主題に対応していると考えられる。撮影が一段落した9月にはKBS フォトとして採用する写真の審議を行うために板垣鷹穂・谷川徹三・杉山平助・藤田嗣治・成澤玲川を構成員とする写真委員会が組織され⁽²⁷⁾、写真が含む情報量だけでなく審美性も加味した選定が行われた。さらに新たな主題として「伝統文化」を加える方針が打ち出された。10-12月には撮影された写真を主題ごとの写真帖として纏めるという構想「Japanese Life に関する写真帳製作の件」が具体化し、「写真つき参考資料叢書」(the series of reference books with portfolios of photographs)と名付けられている⁽²⁸⁾。8月の網羅的な撮影はこの写真帳を纏めるためになされたと推測されるが、関連記事はこれ以降見当たらず、出版も確認できない。

11月初旬には京都・奈良で撮影が行われた。9月の委員会の意見を反映してのことか、伝統文化主題が撮影された。二人の写真家が一名の理事とともに奈良京都に出張し、美術品・伝統工芸品・歴史的建造物の撮影をした（約1,000枚）。渡辺義雄はこれと類似した回顧を行っており、時期を特定できないが木村・理事黒田清と KBS フォトの撮影のために京都に撮影に行ったことを

回想している⁽²⁹⁾。

「第五回評議員会議事録」によると昭和十年度には中項目500主題2,500枚の写真が完成し、昭和十一年度にはさらに中項目800主題を製作する予定となっている⁽³⁰⁾。昭和十年度には「日本の文化と生活」シリーズを写真帳「写真つき参考資料叢書」として纏める企画が継続しており、『日本文化叢書』の編纂と関連づけて写真製作が行われたと考えられる。

1936年からは新たに「教育」主題の撮影が開始され、1-3月には約500枚が撮影された⁽³¹⁾。大学以下のあらゆる学校（幼稚園・小学校・中学校・法律学校・園芸学校・職業専門中学校・女学校等）を撮影したとあり、この時撮影されたモチーフは1937年出版の『JAPANESE SCHOOL LIFE THROUGH THE CAMERA』（図1）以下『日本の学校生活』と略記）に掲載された写真のモチーフと重複している。続く4-6月には木村・渡辺によって「都市」「芸術」「年中行事」主題の補充撮影が行われた⁽³²⁾。7-9月には包括的なフォトライブラリー形成のため更に一名の写真家（前後の撮影から坂本万七と推測される）が専属として雇われ、補充撮影が行われた⁽³³⁾。

1937年7-12月には坂本万七（桃源社坂本写真場）による農業主題（農繁期農村、産業組合等）の撮影が集中的に行われた⁽³⁴⁾。7月には教育関連の写真を取録した第七回世界教育会議配布用の写真集『日本の学校生活』の撮影が完了した⁽³⁵⁾。この写真集は国際文化振興会編集発行、木村伊兵衛撮影となっており、写真が50枚収録されている。近代的な設備を整えた大学以下の学校や、西洋化した教育プログラムを撮影したものであり、第七回世界教育会議に参加した欧米の教育関係者に向け、先進国としての日本イメージをアピールする目的で作製された。この写真集に掲載されたKBSフォトの選定は写真委員会が行った。委員であった板垣鷹穂はその様子を「ここに選定された写真は、振興会から写真家諸氏に依頼して撮影した非常に多数の作品中から、数人の関係者によつて第一回の粗選り百数十枚をとり、それを基礎として、その中から再選しながら更に全体のストックを吟味して必要なものを補充する一と云ふ念入りの方法を採用したのである⁽³⁶⁾」と語っている。審査機関である写真委員会の活動はこれ以降辿れない。『日本の学校生活』は写真委員会が製作に関与した唯一の写真集である。1937年10月以降には製作、配信が日本工房関係者に委託されるようになり、写真事業全体のシステムが変わり、評論家主導の審議委員会は有名無実化したためと考えられる。前半期にはフォトライブラリー形成のための計画的な撮影が行われ、定められた主題のほとんどを網羅した撮影が行われた。一方、配信は個別の要請に応じる小規模なものに留まっていた。



図1 『JAPANESE SCHOOL LIFE THROUGH THE CAMERA』表紙。
木村伊兵衛撮影、国際文化振興会編集発行、1937年、国立国会図書館所蔵。

4、後半期—1937年10月－1945年8月—利用と収集の多様化—

1937年7月の日中戦争勃発前後には日本の動向に国際的な関心が集まり、海外からの文化資料の照会が増大した。このような状況のもと、外務省の外郭団体であった振興会は照会に応じるだけでなく、積極的に自国文化を宣伝していった。長島喜三はKBS フォトを紹介する文章で、「我が国の対外文化事業も、嘗ての、諸外国に於ける認識是正や誤解への言い解きといふ段階から、支那事変を転機として、又、殊に最近の国際情勢に直面して、今日では、積極的文化宣揚、文化紹介の段階に入った⁽³⁷⁾」と述べるように、日中戦争は報道戦であり、振興会のみならずあらゆる情報機関が写真・映画・ラジオ・グラフ雑誌など当時の最新メディアを総動員して国家宣伝を展開していった。このような傾向は日中戦争開戦後から終戦まで持続する。振興会に関しては1940年12月の情報局への移管後はさらに国策宣伝一色となり、その資料作製事業は「日本文化宣揚の資料は対外文化工作の弾丸である。日本はこの弾丸が少い。(中略)従つてこの弾丸製造が文化事業の一つの大きな仕事となつて来る」と意義づけられ、書籍・写真・映画などは宣伝手段であることをはっきり表明するようになった⁽³⁸⁾。

振興会は1937年5月14日の「第四十六回理事会」において「本年より本会の海外活動を強化する参考として国別に文化工作の方針方法につき外交官、実業家、学者等を招き意見交換を行うことに決定」し⁽³⁹⁾、対外宣伝に本格的に乗り出した。日中戦争開始後には振興会予算は増額され、昭和十三年度の写真配信総数は昭和十一年度の10倍以上となり⁽⁴⁰⁾、海外の展覧会や見本市の機会を活用した国情紹介を盛んに行うようになる。1937年10月、振興会は『NIPPON』等の出版物販路拡大のための外遊から帰国した名取洋之助に写真配信を一任した。これにより、写真事業の担い手は振興会直属の写真委員会から日本工房へシフトし、写真製作の目的は教育よりも文化宣伝の意味合いが強くなった。KBS フォトライブラリーに関しては後半期、ストック形成のための作製よりも国家宣伝を目的としたその有効利用が重要視され、このような情勢にあつてフォトストックとしての本領を発揮するようになる。

振興会が外務省から情報局に移管された1940年12月には宣伝する地域の変化（欧米から中国・東南アジアへ）、利用の変化（万博・見本市・美術館等出品から現地住民宣撫のための移動写真展覧会出品へ）が認められる。後半期をさらに、1937年10月－1940年11月、1940年12月－1945年8月に分けることができる。

1937年10月－1940年11月—国情紹介と貿易振興—

前半期（1935年7月－1937年9月）の写真配信は、エージェントや外務省を通じた個別対応の小規模なもの（書籍・雑誌・新聞掲載、大使館への贈与）であつたが、後半期には写真資料の用途に万国博覧会・見本市出品（1937－40年に工芸・手工業・民俗資料等出品、計29回）が加わり、

写真活用が増大する(図2)。名取の着想による、実物展示だけでなく実演・写真・映画資料を交えた展示によって好評を博した「日本の日用品展」(1938年3月、於ライプチヒ)、「第一回国際手工業博覧会」(1938年5月、於ベルリン)の経験から、振興会は貿易振興の機会を利用して積極的に文化宣伝を行うことを商工省や商社等に提案し、実行に移していた⁽⁴¹⁾。その内容は見本市の機会に「日本品」(工芸品・手工業品等)だけでなく国情紹介資料(映画・写真等)も出陳するというものである。これにあわせて『傘』『竹籠』(1938年)など製作工程を説明するための文化映画が振興会で多数作製され、写真「文化と生活」シリーズも文化資料や工芸品製作等の主題が多くなった。

この時期には写真の収集方法も多様化する。前半期にはKBS フォトライブラリーののための撮影は「文化と生活」シリーズだけであったが、1938年以降は海外発送用の出品物(民俗資料や美術品等)を撮影し、フォトライブラリーに加えるというスタイルが定番となる。さらに、購入写真や寄贈写真、展覧会出品写真や書籍・雑誌掲載用写真をKBS フォトライブラリーに追加するという事例も多くなる⁽⁴²⁾。

とはいえ、「文化と生活」シリーズは終了したわけではなく、坂本万七・溝口宗博・田辺某が中心となり、細々とではあるが、定期的な撮影を行った。機関誌『国際文化』口絵には「KBS フォト文化と生活」が掲載されているが、これにより杉山吉良・土門拳・若松不二夫・光墨弘など名取洋之助の周囲にいた写真家が撮影に関わったことが分かる。長島喜三は後半期、振興会嘱託の写真家は12名に増えたとするが、その詳細は不明である⁽⁴³⁾。ともあれ、時局による写真需要が増大し、なおかつ写真家の製作の自由がある程度許容されたという点で、日中戦争開始後から情報局移管までの3年半ほどの期間が最も振興会の写真事業が盛んになったといえる。後半期の特徴は、写真利用の活発化に伴い、「文化と生活」シリーズの撮影も他事業と緊密に連動させて行われるようになる点である。撮影の詳細は文末の表を参照されたいが、後半期の撮影はその目的によって、①前半期の補充撮影、②製作工程撮影、③資料記録撮影、④写真集製作用撮影の4種に分けることができる。これらは「文化と生活」として撮影されKBS フォトライブラリーに収まったが、前半期と異なるのは、フォトストック形成のためだけに製作されたのではなく、展覧会出陳や写真集掲載など使用目的が先行して製作されたことであろう。上記の分類に沿って「文化と生活」撮影を



図2 第一回国際手工業博覧会(1938年5-7月、『国際文化』1号掲載)。
上 人形製作工程陳列場。
下 傘製作写真とヒトラーへ寄贈された七宝。
人形写真は名取洋之助、傘製作写真は土門拳撮影。

見ていくと以下のように纏められる。

①補充撮影は坂本万七・溝口宗博・田辺某などによって適宜行われた（「年中行事」「時事写真」「交通」「工業」「建築」等）。

②見本市や万国博覧会へ実物とともに製作工程を撮影した写真や映画が出品された。人形・表装・陶磁器・竹細工・養蚕など、日本の伝統的な手工業に関わるさまざまな写真が撮影された（図2）。

③資料の記録撮影は、海外見本市や博物館への出品物発送前に坂本万七・溝口宗博等によって行われた⁽⁴⁴⁾。例を上げると、1939年には「桑港万博日本古美術展」送付用古美術作品写真を坂本万七・大塚工芸社が撮影した。同年には「伝統生活資料展覧会」（於トロカデロ民族博物館）に農村生活・衣食住文化・現代手工業等関連資料とともに資料写真（陶器・弓・竹籠製作工程、伝統生活資料等）を出品している。1940年3月には「シドニー日本特産品展覧会」出品物の撮影、「ポルトガル八百年祭」出品物の撮影が行われている。このような資料出品に伴った記録撮影は、②の製作工程の写真と同様で日本が欧米と交流があったこの時期だけに行われた。文化資料を撮影した記録写真はKBS フォトライブラリーに収められ、「伝統文化」のストックを充実させた⁽⁴⁵⁾。

④ KBS フォトを掲載した写真集の製作は後半期に活発化する。この時期振興会は配信を担う名取洋之助率いる日本工房（1939年5月国際報道工芸に改称）に写真関連作品の製作を外注するようになっていたためである。これらの出版物については『名取洋之助と日本工房⁽⁴⁶⁾』に詳しいが、この時期には振興会発行、日本工房製作の KBS フォト関連写真集が続々と出版されるようになり、「文化と生活」撮影もこれらの出版企画と関連しているものが散見される。一例を上げると、1938年6-10月には土門拳・溝口宗博・坂本万七・田辺某によって学校体育・伝統競技・西洋スポーツが集中的に撮影されたが、これはモチーフや時期から写真集『SPORTS』（1939年）掲載のための撮影であったと考えられる

（図3）⁽⁴⁷⁾。また、1940年5-9月には『国民学校教育』（1943年、『日本の学校生活』改訂版）⁽⁴⁸⁾と幻灯板「教育」シリーズ製作のための学校生活の撮影が行われた。また、既撮の KBS フォトを編集した写真集としては1940年前後には解説付き写真叢書『JAPAN A CLOSE-UP』（『日本クローズアップ』、欧米向け）や『VISAGE du JAPON』（『日本の顔』、ベトナム向け）が製作された（図4）⁽⁴⁹⁾。両者とも編集方針は同じで、日本の伝統と近代的発展を

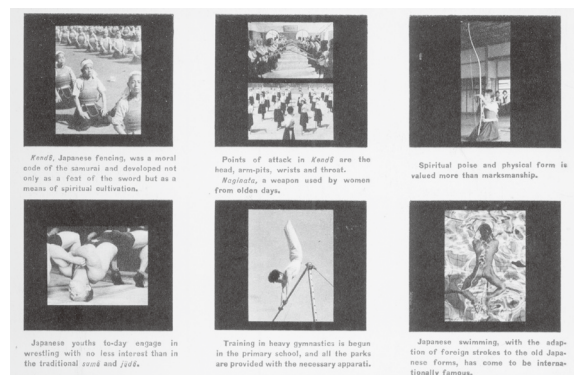


図3 KBS フォト写真叢書『SPORTS』（国際文化振興会、1939年）掲載写真。

上は伝統スポーツ、下は近代スポーツの写真が掲載されている。

示す主題（「国土」「通信」「伝統文化」「産業」「スポーツ」「女性」等）を、写真と解説文によって紹介するものであり、各主題は「文化と生活」の主題（大項目）とほぼ一致する。この二冊に掲載された都会で働く女性の主題は「文化と生活」として1939年8-11月に撮影されたものと考えられる。

また、この時期には写真を応用した作品製作が盛んになった。文化宣伝のため、写真を壁画・看板・屏風形式に加工し、国情紹介の目的で海外の展覧会等に出陳する機会が増えたためである。1938年9月-1939年3月には振興会の委嘱により木村伊兵衛・土門拳・渡辺義雄・杉山吉良・溝口宗博が日本全国を撮影し（約2,000枚）、紐育万博用写真壁画《躍進日本》、桑港金門万博用写真壁画《通信篇壁画》《放送篇壁画》が製作された（ともに1939年開催）⁽⁵⁰⁾。写真壁画とは1936年頃から作製されだした、引き伸ばした写真をモンタージュした壁写真を示す⁽⁵¹⁾。その視覚効果からこの時期各国の政治プロパガンダに使用された。振興会製作の写真作品には屏風形式のものもある。1940年には「シドニー日本特産品展覧会」へ木村伊兵衛撮影《マツダ・ランプにて》、渡辺義雄撮影《農村の雪》を都会篇・農村篇として二曲一双屏風に仕立て、三越製作のマネキンとともに出品した⁽⁵²⁾。国内展覧会への出陳の機会は1938年「思想戦展覧会」以降増大したが、多くは「文化と生活」で撮影された写真を全紙サイズ（447×550mm）に引き伸ばして出品した⁽⁵³⁾。これらの写真加工作品に使用された写真も、KBS フォトライブラリーに収められたと考えられる。例えば、桑港金門万国博覧会出品の《放送篇壁画》使用写真のうちマイクに向かう女性像（図5上）とヴァージョンを違えた写真がKBS フォトとして『VISAGE du JAPON』に掲載されている（図5下）⁽⁵⁴⁾。

日中戦争開戦から情報局移管までの時期には写真利用が増大した。この時期の写真関連作品の製作はほとんど日本工房が行ったと考えられる。宣伝合戦のためインパクトのある写真壁画や写真屏風など様々な写真作品が生み出された。それにともない、写真製作も他事業と連動して行われるようになり、多様化していった。

1940年12月-1945年8月—写真移動展—

1939年、参謀本部の依頼により「写真看板」（国際報道工芸製作による写真を貼付した看板、



図4 上 『JAPAN A CLOSE-UP』（国際文化振興会、1940年）。

下 『VISAGE du JAPON』（国際文化振興会発行、国際報道工芸株式会社印刷、1942年）。



図5 上 写真壁画《放送篇壁画》部分、マイクに向かう女性像。『国際文化』3号掲載。
下 別バージョンの写真をKBS フォトとして使用。『VISAGE du JAPON』掲載。



図6 「看板写真」(中国向け文化宣伝用、1939年5月)『国際文化』5号掲載。

図6) が製作され、中国で初めての移動写真展が行われた。これ以降参謀本部や内閣情報部による中国・東南アジアの住民宣撫用写真作品の依頼が徐々に増加し、「皇紀二千六百年記念展覧会」、「タイ憲法発布記念共進会」、仏印向移動写真展等、振興会は終戦まで6回ほど海外向け移動写真展を行い、これらは国内にも巡回した。森仁史は「移動写真展」において、政治プロパガンダには「直接的に大衆の視線を一定方向に誘導し組織する点で、展示という形態が盛んに用いられた」とし、なかでも写真を看板に貼り付けた移動写真展は「展示としてきわめて素朴であったが、現地住民から大きな反響があった⁽⁵⁵⁾」と述べる。

1940年12月に情報局が成立し、国内の国際交流団体が一元化されるに伴い、振興会も外務省から情報局に移管され、対アジア向けの政治プロパガンダ活動に終始するようになる。もはや、この段階ではストックのための撮影はほとんど行われず、KBS フォトを加工した宣伝資料(写真壁画・「写真看板」・写真叢書『国民学校』『重工業』・幻灯板「文化と生活」シリーズなど)の製作が写真事業の中心となる。1943年以降の写真事業の記録は国内外に向けた移動写真展に関するものがほとんどとなり、戦前の振興会の写真作製は、昭和十八年度の事業報告(1944年7月28日付)の「写真事業に於ては本年度中四十二点の撮影を完成せる外、東亜共栄圏に対する写真移動展覧会開催の企画に従ひ日本文化紹介用各種大型写真の作製を継続して居ります」という記録以降辿れない⁽⁵⁶⁾。

5、終りに

本稿では写真「日本の文化と生活」シリーズ作製を中心に KBS フォトライブラリーの形成過程を辿った。前半期にはストック形成のための撮影が集中的に行われ、報道写真第一世代の木村伊兵衛や渡辺義雄らが主要な主題（大項目）の撮影を網羅的に行うことによって KBS フォトライブラリーの礎を築いた。後半期には坂本万七・溝口宗博・土門拳など報道写真第二世代の写真家たちが撮影に従事するようになり、前半期の補充撮影を行った。企画当初の KBS フォトライブラリーは振興会直属の写真委員会が中心となり、日本文化研究の補助教材として準備されたものであったが、1937年夏以降は日中戦争開始に伴う国家宣伝が急務となり、ストックフォトをいかに有効活用するかということが重要視され、製作の担い手は日本工房へ移り、写真は宣伝の手段として活用されていく。振興会は貿易振興のための万国博覧会や海外見本市で工芸品等を出品する機会を利用し、国情紹介写真や映画を行った。このような写真活用の拡大にともない、1937年10月－1940年12月には KBS フォトの収集方法も多様になる。「日本の文化と生活」シリーズを母体として、出陳品記録写真や写真集製作用写真が加えられた。さらに海外展覧会へ出品するために製作された写真壁画や写真看板に使用された写真もフォトライブラリーに加えられたと考えられる。1940年に入ると内閣情報部や参謀本部の要請により写真は政治プロパガンダのツールとしてさかんに利用されていくこととなる。新たな写真製作はほとんど行われなくなり、「写真看板」「写真壁画」などの写真関連作品の製作が写真事業の中心となる。

時局柄、振興会そのものの右傾化に伴い、日本文化紹介を目的として企画された KBS フォトも「学問的な」文化資料たり得ず、国情紹介や貿易振興のツールとして価値を認められ、機能していったといえよう。

本研究はメトロポリタン東洋美術研究センターの助成を受けて行われました。調査にあたっては JFL に貴重な資料を閲覧させていただきました。さらに執筆にあたっては様々な方々にご教示をいただきました。ここに、感謝申し上げます。

KBS フォト作製年表

＊国際文化振興会事業報告書、議事録、機関誌より作成。

＊断り書きがない撮影は「日本の文化と生活」シリーズとしての撮影。

〔 〕は「文化と生活」シリーズの項目名。項目名は議事録と1939年と1940年発表の項目を参照した。〔産業〕〔建築〕〔交通通信〕〔社会事業〕〔社会生活〕〔都会生活〕〔時事〕〔都市〕〔教育〕〔学校生活〕〔体育〕〔スポーツ〕〔家内工業〕〔手工業〕〔年中行事〕〔宗教〕〔趣味〕〔娯楽〕〔家庭生活〕〔四季〕〔風景〕〔農村〕〔芸術〕〔庭園〕〔文化資料〕〔映画スチール〕。また、

〔女性〕〔衛生〕は便宜的に筆者が追加した。

1935 年 7 月	国際文化振興会職員による写真蒐集（雑誌・書籍・新聞等定期刊行物より採取）。企画名「Picture Series on the Life and Culture of Japan」に決定。18 日第一回打ち合わせ。主題、撮影方針及び写真家への撮影依頼方決定。29 日名取洋之助・木村伊兵衛・渡辺義雄に撮影委嘱。31 日写真家の打ち合わせ開催。各人の主題の割り当て、撮影枚数の決定。
1935 年 8 月	名取洋之助・木村伊兵衛・渡辺義雄による撮影。〔年中行事・家庭生活〕慣習・生活・服装・食物・出産・冠婚葬祭・宗教生活。〔スポーツ〕日本伝統競技・西洋近代スポーツ・運動設備。〔社会生活〕裁判所・消防署・警察組織・公衆衛生施設・化学研究所・美術館・出版社・新聞社。〔交通通信〕道路・橋・鉄道・路面電車・自動車・水路空輸等郵送システム。〔産業〕農業・酪農・材木業・漁業・製造業。
1935 年 9 月	写真委員会が組織され、8 月に撮影した写真の審議を行う。委員は板垣鷹穂・谷川徹三・藤田嗣治・杉山平助・成澤金兵衛（玲川）。
1935 年 11 月初旬	写真家二人奈良・京都において美術工芸品・古建築・繊維工業等撮影〔芸術・建築・手工業〕。
1936 年 1-3 月	〔教育〕写真家二名による各種学校撮影。
1936 年 4-6 月	〔建築〕劇場・美術館・工場・商店・図書館・養蚕工場撮影。〔芸術・手工業・娯楽〕舞踊・生け花・人形製作・将棋撮影。〔社会生活〕動物園・プラネタリウム・貯水池撮影。〔年中行事〕靖国神社例大祭・端午祭・流鏑馬撮影。
1936 年 7-9 月	追加で写真家坂本万七に撮影委嘱。〔建築〕国会議事堂・寺社、〔年中行事〕火祭り、〔産業〕重工業・機械工業、〔都市〕市場・鉄道撮影。
1937 年 7 月	〔農村〕坂本万七撮影（～12 月）。〔年中行事〕七夕祭り、〔教育〕学校運動風景撮影。
1937 年 8 月	写真集『JAPANESE SCHOOL LIFE THROUGH THE CAMERA』（木村伊兵衛撮影、国際文化振興会編集発行、1937 年）が第七回世界教育会議において配布される（500 部）。
1937 年 10 月	名取洋之助に写真の宣伝と配給を委嘱。
1937 年 12 月	〔芸術〕写真家田辺某・溝口宗博を委嘱しドイツ写真雑誌掲載用「日本の映画撮影所」シリーズ撮影開始（～翌年 2 月、撮影所・映画製作風景撮影）。
1938 年 2 月	〔宗教〕東京光画社に委嘱しドイツ写真雑誌掲載用「日本寺院生活」シリーズ撮影。「文化と生活」シリーズ補足撮影（建国祭諸事・府立工芸学校・針供養）。
1938 年 3 月	名取洋之助の斡旋により日本の日用品展に実物のほか写真・映画出品（於ライブチビ）。KBS フォトと日本工房所有写真を使用した写真帖『日本』発行（名取洋之助・木村伊兵衛・堀野正雄・渡辺義雄・坂本万七・土門拳等撮影、熊田五郎構成、日本工房製作、国際文化振興会発行）。
1938 年 5 月	名取洋之助の斡旋により第一回国際手工業博覧会に実物のほか写真・映画出品（於ベルリン）。
1938 年 6 月	〔スポーツ〕撮影開始（～11 月）。〔時事〕海軍記念日陸戦隊行進・水上競技・印刷製本工程・日本帯結撮影等。

1938 年 7 月	〔スポーツ〕 明治神宮外苑競技場にて陸上競技を土門拳・溝口宗博が撮影。東京高等師範学校にて夏季体操講習会・日之出高等女学校にて技術教習・YMCA にてフェンシングを坂本万七が撮影。自由学園にてデンマーク体操・実践高等女学校にて薙刀講習を溝口が撮影。〔衛生〕 伝染病研究所・公衆衛生院・通信病院等を坂本・溝口が撮影。
1938 年 8 月	〔衛生〕 継続撮影（伝染病研究所・国民衛生保険院・通信病院等）。
1938 年 9 月	大日本体育協会所属写真家山川某よりスポーツ写真購入。〔スポーツ〕 水泳・テニスを溝口宗博・田辺某が撮影。
1938 年 10 月	〔手工業〕 日本人形製作過程を溝口宗博が撮影。表装工程を坂本万七が撮影。〔スポーツ〕 講道館にて柔道を坂本が撮影。
1938 年 11 月	タイ国憲法祭に「文化と生活」シリーズ全紙引伸写真出品。〔芸術〕 徳川頼貞より楽器写真寄贈。
1939 年 1 月	〔芸術〕 絵画・彫刻作品を坂本万七が撮影（～2 月）。
1939 年 3 月	木村伊兵衛・渡辺義雄・土門拳・杉山吉良・溝口宗博が桑港紐育万国博覧会出品の写真壁画製作のため日本全国を撮影（総計 2,000 枚）、桑港万国博覧会出品用写真壁画《通信篇壁画》《放送篇壁画》、紐育万国博覧会出品用写真壁画《躍進日本》完成、《躍進日本》は 3 月 18・19 日、《交通通信》は 3 月 25・26 日上野府美術館にて一般の観覧に供し、展示終了後直に現地へ発送。桑港万国博覧会日本古美術展覧会出品用本邦古美術品写真完成。
昭和 13 年度	主題中項目 2,500 種、小項目約 8,000 種完成。主題の大項目は〔産業〕〔建築〕〔交通通信〕〔教育〕〔宗教〕〔社会事業〕〔都会生活〕〔日本の四季〕〔芸術〕〔趣味娯楽〕〔スポーツ〕〔家庭生活〕〔映画スチール〕〔庭園〕の 14 種。
1939 年 5 月	「文化と生活」シリーズ補足撮影（製陶・電気機械・雅楽・スポーツ・現代美術等）。
1939 年 7 月	〔文化資料〕 トロカデロ民族博物館寄贈用資料撮影開始（～10 月）、陶器・弓製作過程撮影。〔女性〕 ニューゼaland 百年祭出品用「働く女性」シリーズ撮影。
1939 年 8 月	〔女性〕 病院・放送局・銀行にて「働く女性」シリーズ撮影。〔文化資料〕 ブラッセル国際人形展覧会出品用人形撮影、トロカデロ民族博物館寄贈用竹籠製作撮影。
1939 年 9 月	〔スポーツ・女性〕 明治神宮にて女子水泳大会撮影。〔女性〕 第一生命保険相互会社にて婦人ラジオ体操撮影。〔芸術〕 帝室博物館にて《鳥獣戯画》撮影。〔文化資料〕 北海道にてアイヌ風俗撮影。〔都市〕 銀座にて夜景・商業施設撮影。〔文化資料〕 民族博物館寄贈用伝統生活撮影。
1939 年 10 月	〔文化資料〕 スtockホルム博物館寄贈用住宅模型撮影、インドパチアラ王国寄贈用庭園宮殿模型撮影。〔都会生活〕 第一生命保険相互会社オフィス撮影。〔家庭生活〕 菊本某邸撮影。
1939 年 11 月	〔社会生活・女性〕 三越にて女性店員の保健体操撮影、東山動物園にて働く女性撮影。〔文化資料〕 九州にて古跡撮影、日本埃及児童画交換展覧会出品作撮影。〔時事〕 皇紀 2600 年記念宮城広場拡張事業労働奉仕撮影。
1939 年 12 月	タイ国憲法祭に写真壁画《産業篇》《娯楽篇》、山車《平和》出品。中国向け国情紹介用の写真貼付看板完成。〔文化資料・芸術〕 宮崎にて郷土舞踊撮影、東京府美術館にて日本刀試切撮影。

1940 年 1 月	〔スポーツ〕国技館にて春場所相撲撮影。〔時事〕宮城前広場にて陸軍始観兵式撮影、代々木競技場にて帝都消防検閲式撮影。〔年中行事〕日比谷公園にて羽根突風景撮影。
1940 年 2 月	〔時事〕警報団体演習撮影、紀元節陸上式典撮影。〔文化資料〕ポルトガル八百年祭出品用日葡交渉資料撮影（～4 月）。〔文化資料・芸術〕イタリア民衆文化大臣宛送付用能面・能衣装撮影。〔建築〕日光東照宮撮影。
1940 年 3 月	『JAPAN A CLOSE - UP』出版。桑港・紐育万博出品写真壁画（航空・造船・紡績・機械工・手工業）製作。〔文化資料〕シドニー日本特産物展覧会出品物撮影、〔建築・風景〕東照宮・松並木撮影、〔文化資料・芸術〕イタリア芸術劇場寄贈用能衣装撮影。
1940 年 4 月	〔文化資料〕グーデンベルグ 500 年祭出品用に印刷資料撮影。
1940 年 5 月	京城日報社主催皇紀 2600 年記念展覧会用に写真壁画『躍進日本』複製（7 月完成）。〔教育〕写真叢書『国民学校教育』（1943 年出版）掲載用写真補足撮影（～6 月、各種学校）。『文化と生活』補足撮影。〔時事〕本会事業記録写真撮影（～10 月）。
1940 年 6 月	シドニー日本特産品展覧会に写真屏風出陳（木村伊兵衛撮影都会篇『都会と女性』と渡辺義雄撮影農村篇『農家の雪』を加工し、六曲一双屏風に仕立て、三越製作のマネキンとともに展示）。〔手工業〕高島屋にて蛇の目傘・刺繍製作撮影。〔文化資料〕『徳川法制史』挿入用写真撮影（～7 月）。
1940 年 7 月	大和民族小学生生徒作品展覧会出品用写真壁画（全紙大 12 枚）完成。『文化と生活』シリーズ補足撮影（朝鮮音楽演奏・舞踊・忠犬ハチ公像・タイ国留学生）。
1940 年 8 月	愛知県商工中部貿易展覧会に文化紹介の全紙大写真出品。〔文化資料〕海外展覧会用の資料写真撮影。タイ国憲法発布記念共進会出品用壁画写真完成。『文化と生活』シリーズ補足撮影（グライダー実習・水泳練習・勤労奉仕・正倉院御物）。
1940 年 9 月	〔教育〕勤労奉仕・小学校の図書教育・理科教育、幼稚園の園児生活等撮影。〔文化資料〕家屋模型・『徳川法制史』挿図用能人形・日本人形・小学生徒作成品・漆器製作過程等撮影。
1940 年 10 月	〔芸術〕中能島欣一・今井慶松箏曲演奏会撮影。〔建築〕加藤左武郎邸宅・東京府立園芸学校撮影。〔時事〕観兵式予行演習撮影。〔産業〕東京日日新聞社印刷工場輪転機撮影。仏印向移動写真壁画完成。写真叢書『重工業』（1942 年）掲載用写真撮影。
1940 年 12 月	KBS フォト主題小項目総計 16,991 種。大項目は〔産業〕〔家内工業・手工業〕〔建築〕〔教育・学校生活〕〔体育・スポーツ〕〔交通〕〔都会生活・社会生活〕〔四季〕〔芸術〕〔趣味〕〔庭園〕の 11 種。
昭和 18 年度	『文化と生活』シリーズ 42 枚撮影。移動写真展用に日本文化紹介用各種大型写真の作製。

注

- （1）文化交流事業は「対外連絡」「講師の派遣並に教授学生の交換及招請」「外国人の日本研究に対する奨励及便宜供与」「講演会、展覧会、演奏会の開催」「知名外国人及団体の招請」「資料の作製」「資料の配給交換」の 6 項目である。後者 2 項目の「資料」は文字資料（書籍・雑誌）と視聴覚資料（映画・写真・幻灯板・レコード盤等）に大別される（『国際文化振興会事業報告 国際文化事業の七ヶ年』国際文化振興会、1940 年）。
- （2）「設立趣意書」『昭和十年度事業報告書』青木節一編、国際文化振興会、1937 年、JFL。
- （3）KBS は国際文化振興会のローマ字表記 Kokusai Bunka Shinkokai の頭文字をとった略語。1940 年頃にはフォ

トライブラリーは各新聞社のもの、鉄道省国際観光局の「BTI フォト」、写真協会の「GTL フォト」などがあった。

- (4) このシリーズを示す英語名称は「Japanese Life and Culture in Pictures」「Photographic series on Japanese life and culture」など様々であるが、『K.B.S.Quarterny』（April-June 1935）にはこの新しい企画を「Picture Series on the Life and Culture of Japan」と呼ぶこととなった、とされているのでこれを正式名称として採用した。
- (5) 前出注（1）、48-49頁。
- (6) 井上祐子『戦時グラフ雑誌の宣伝戦』青弓社、2009年。
- (7) 川崎賢子・原田健一『岡田桑三映像の世紀 グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』平凡社、2000年。
振興会の文化写真の製作に関しては「第十二章対外宣伝と外務省—国際報道写真協会の仕事」で触れているが、具体的な事業内容についてはほとんど言及はない（229-230頁）。
- (8) 白山真理「対外宣伝への道—名取洋之助が外遊（1936—37）で得たもの—」（『日本写真芸術学会誌平成一一年度』第8巻第2号、日本写真芸術学会、2000年1月）、白山真理「名取洋之助の挫折—国際文化振興会との1938—45—」（『日本写真芸術学会誌平成一二年度』第9巻第1号、日本写真芸術学会、2000年6月）。
『NIPPON』については Gennifer Weisenfeld, “Touring Japan-as-Museum”, positions, vol.8, no.3, winter 2000
- (9) 柴岡信一郎『報道写真と対外宣伝 十五年戦争期の写真界』日本経済評論社、2007年。
- (10) 『財団法人国際文化振興会の仕事』国際文化振興会、1934年4月。
- (11) 樺山愛輔『昭和十年度事業方針並に計画案』『国際文化振興会関係』一、外務省記録、JACAR（アジア資料センター）Ref. B04012422100（以下外務省記録については同一のため、レファレンスコード省略）。
- (12) 同上。
- (13) 「第十六回理事会」『国際文化振興会関係』一、外務省記録。
- (14) 「第十八回理事会」『国際文化振興会関係』一、外務省記録。昭和九年度の支出には「映画」と「幻灯」のみ計上され、「写真」はない（「第四回評議員会議事録」『国際文化振興会関係』一、外務省記録）。
- (15) 『日本文化叢書』（英文）は「第十八回理事会」（1935年3月18日）にて協議された。同年5月には「日本文化叢書編纂委員会」が発足し、21名の専門家が執筆に携わった。1935年4月22日から1942年10月8日まで編纂の記録があるが、戦後も含めそれ以降の記載がなくなり、刊行も確認できない。
- (16) 「Japanese Life and Culture in Pictures」『K.B.S.Quarterny』April-June 1935, Vol.1 No.1, pp.15-16.
- (17) 前出注（14）。
- (18) 「国際文化振興会議事要録 第二十二回理事会」『国際文化振興会関係』一、外務省記録。
- (19) 中屋健二「対伯国際文化事業調査報告」『国際文化振興会関係』一、外務省記録。
- (20) 前出注（1）、48-49頁。
- (21) 「昭和十三年度事業報告 自昭和十三年四月至昭和十四年三月」国際文化振興会、19-20頁、JFL。
- (22) 「資料の作製」、前出注（1）、48-49頁。
- (23) この人選に関して、渡辺義雄は当時『NIPPON』等名取の手伝いをしていたため、この推薦は名取によるものだろうと推測している（渡辺義雄「国際報道写真協会の思い出」『木村伊兵衛 写真集昭和時代』第一巻、筑摩書房、1984年、183頁）。
- (24) 木村伊兵衛「KBS 写真資料撮影の頃」『国際文化』115号、1964年1月、25頁。
- (25) 同上。
- (26) 前出注（19）。
- (27) 『K.B.S.Quarterny』July-September 1935, Vol.1 No.2, pp.15-16.
- (28) この叢書は企画の段階で中断したと考えられる。
- (29) 1935年4月に、渡辺は振興会の撮影で木村と黒田清（理事）とともに京都奈良に行ったことを回想している。しかし、『K.B.S.Quarterny』では正式の委嘱は7月とされる（渡辺義雄「国際報道写真協会の思い出」『木

- 村伊兵衛 写真全集昭和時代』第一巻、筑摩書房、1984年、183頁）。
- (30) 「第五回評議員会議事録」『国際文化振興会関係』一、外務省記録。
 - (31) 『K.B.S.Quartery』 January-March 1936, Vol.1 No.4, pp.13-14.
 - (32) 「photographic series on Japan」『K.B.S.Quartery』 April-June 1936, Vol.2 No.1, p.16.
 - (33) 同上、12頁。
 - (34) 「K.B.S.PHOTO 文化と生活―農業編 撮影坂本万七」とある（口絵『国際文化』6号、1939年10月）。
 - (35) 『JAPANESE SCHOOL LIFE THROUGH THE CAMERA』Kokusai Bunka Shinkokai, 1937。木村伊兵衛の最初の写真集とされる（石井亜矢子「木村伊兵衛年譜」『定本木村伊兵衛』田沼武能・金子隆一監修、朝日新聞社、2002年、311頁）。撮影完了は『月報』七月号（1937年8月、18頁）。
 - (36) 板垣鷹穂「写真展月評」『アサヒカメラ』第24巻第2号、1937年8月。
 - (37) 長島喜三「対外文化事業と写真」『アサヒカメラ』第30巻第6号、1940年12月。
 - (38) 前出注（1）。
 - (39) 「第四十六回理事会議事要項」『国際文化振興会関係』一、外務省記録。
 - (40) 写真配信の総数は昭和十年度389枚、昭和十一年度1,474枚、昭和十三年度16,079枚（前出注（21））。
 - (41) 「座談会文化と貿易」『国際文化』9号、1940年5月。
 - (42) 寄贈は1938年11月の会長徳川頼貞より楽器写真があり、購入は同年9月に大日本体育協会よりスポーツ写真がある。
 - (43) 前出注（37）。
 - (44) 『月報』10月号（1938年11月）、3月号（1939年4月）、3月号（1940年4月）、4月号（1940年5月）等参照。
 - (45) 「KBS フォトのクレジットがついた写真（『国際文化』『JAPAN A CLOSE - UP』『VISAGE du JAPON』）と振興会資料の撮影記録を照合すると主題・撮影時期・撮影者が合致するものが複数発見できたため。
 - (46) 白山真理・堀宜雄編『名取洋之助と日本工房 [1931-45]』岩波書店、2006年。
 - (47) 『SPORTS』K.B.S. Foto Series on Japanese Life and Culture, vol.1, Kokusai Bunka Shinkokai, 1939.
 - (48) 『国民学校』を指す。南方への現代日本文化紹介を目的として南方語による写真叢書『重工業』（国際文化振興会、1942年、ハケ国語）、『国民学校教育』（国際文化振興会、1943年、ハケ国語）が出版された。
 - (49) 『JAPAN A CLOSE - UP』はKBS フォトを中心に掲載しているが補完的に他のフォトライブラリーの写真も掲載している。『VISAGE du JAPON』（国際文化振興会発行、国際報道工芸株式会社印刷、1942年）、この本に使用されている写真はすべてKBS フォトである。
 - (50) 『月報』9月号（1938年10月）-3月号（1939年4月）。
 - (51) 装置としての写真壁画が観者にもたらす視覚効果や空間については林三博「宣伝の倒錯―写真壁画という光学装置の共犯と裏切り―」（『思想』996号、2007年4月）に詳しい。
 - (52) 木村伊兵衛による《都会と女性》と渡辺義雄による《農家の雪》が都会篇・農業篇として一つの屏風に仕立てられた（『月報』3月号、1940年3月）。
 - (53) 1939年1月には明治大学主催日本文化展示会出品用として「建築」「産業」「芸術」を全紙サイズで製作、展示（『月報』1月号、1939年2月）。1940年7月大日本力行団主催大和民族展覧会に児童生活状況を示す写真・出版物を出陳（『月報』7月号、1940年8月）。1940年8月には愛知県商工中部貿易展覧会出品の本邦文化紹介写真を出陳（『月報』8月号、1940年9月）。
 - (54) とともに『国際文化』3号（1939年3月）、『JAPAN A CLOSE - UP』（国際文化振興会、1940年）、『VISAGE du JAPON』（国際文化振興会、1942年）。
 - (55) 森仁史「移動写真展」『名取洋之助と日本工房 [1931-45]』白山真理・堀宜雄編、岩波書店、2006年、110頁。
 - (56) 「昭和十八年度事業概況」国際文化振興会、1944年、JFL。